
阿久悠の卒業論文は『堤中納言物語』 ——「事実」と「解釈」の狭間から考える——

東谷護 愛知県立芸術大学音楽学部教授（音楽学）

はじめに

本小考の目的は、日本のポピュラー音楽、とりわけ戦後の歌謡曲において数多くのヒット曲の作詞を手がけた阿久悠（1937-2007）が、明治大学に提出した卒業論文に選んだテーマが和泉式部であるという「通説」に対して、実際には『堤中納言物語』であったという事実を実証的に提示することである。しかしながら通説として提示されたものが、阿久悠論という視点からみたときに、「解釈」として十分に成り得ることについても言及するものである。

日本近代文学館が創立 15 周年を記念して日本近代文学館（編）『日本近代文学大事典』全 6 巻（講談社、1977-8 年）を出版した。これを元版として、増補改訂を行ったデジタル版のうち 2022（令和 4）年 5 月に第 1 期データが公開された。この増補改訂は 1 年ごとに項目数を増やして更新していく、いわば現在進行形のデータベース事典を目指している¹。この増補改訂デジタル版『日本近代文学大事典』に新規項目として「阿久悠」が立項され²、筆者のもとに、項目執筆依頼が昨夏届いた。

筆者はこれまで占領期における米軍基地内の音楽実践を研究対象とし（東谷 2001, 2005）、その延長線上に音楽実践の「場」から生成される音楽文化の研究を進めてきた（東谷 2014, 2020, 2021）。それと併行して、戦後日本の音楽表現史の構築を目指す研究も進めていた（東谷 1998a）。この一環として、阿久悠とその周辺を研究対象としていた時期があった。その成果として、歌詞分析の可能性について阿久悠『書き下ろし歌謡曲』に収められた歌詞について分析を行った学術論文を 1998（平成 10）年に発表した（東谷 1998b）。

翌 1999（平成 11）年 3 月には、阿久悠を含む作詞家を巡るエッセイを芸術総合誌の『ユリイカ』に寄稿し（東谷 1999）、さらに研究を前進させるために、同 1999（平成 11）年 10 月には阿久悠と彼の所属事務所の協力のもと、阿久悠へのインタビューを行った。その後も足取りは遅いものの学術的な視点による阿久

悠研究を進め、2004（平成16）年頃から阿久悠に関する学術論文集を世に問う準備をしていた。しかしながら、出版社の都合で2007（平成19）年2月に出版企画が頓挫してしまった。この半年後、2007（平成19）年8月1日に阿久悠逝去の悲しい知らせが私たちのもとに届いた。この年の暮れ、2007（平成19）年12月に追悼特集として、『阿久悠のいた時代——戦後日本歌謡曲史』が刊行された（篠田、斎藤2007）。この追悼本に阿久悠の創作原点に父親の存在があることと、創作において女性を強く意識していたことについて、先述したインタビューを踏まえた論考を寄稿した（東谷2007）。その後、出版の見込みが立たなくなってしまったことと、筆者自身の体調不良により阿久悠研究の歩みは残念ながら止まってしまった。

今回の新規項目執筆依頼を受けて、あらためて阿久悠の作品や発言を再検討するとともに、阿久悠逝去後の「阿久悠論」にも目を向けた。なかでも驚いたことは、吉田悦志が著した『阿久悠 詞と人生』によって、阿久悠の卒業論文のテーマは和泉式部である（吉田2017: ii, 87）ことが通説となっていたことであつた。

本考では、先ず阿久悠の創作の原点にあつた可能性のある父親の存在と東京という場所を中心に阿久の経歴について確認した後に、阿久悠の卒業論文についての語りを明示する。この語りによって、これまでの阿久悠の卒業論文に関する通説が大きな誤りであつたことが実証的に指摘されることになる。その上で、なぜこのような事実とは違う解釈が成立してしまったかについて言及する。なお、本文中に引用する、筆者が行つた阿久悠へのインタビューについてはその都度、出所を明示しない。

巻末に、今後の学術研究、並びに阿久悠論を展開する後続の方々のために、筆者が阿久悠へ行つたインタビューのうち、卒業論文とその周辺に関する部分を基礎資料として公開することにしたい。

1. 阿久悠の創作活動の原点を探る

阿久悠こと深田公之は、1937（昭和12）年2月7日に警察官の父親のもと兵庫県淡路島に生まれる。淡路島で過ごした日常生活について、阿久は説明を施す。

子どもの頃、僕は淡路島にいたわけですけど、あの当時の田舎は本当に田舎なんです。いまの田舎は、少々中央から距離があるというだけで、同じ情報を得ているわけですが、距離があればあるだけ情報の数が少なくなっていくというのが当時でしたから、わからなければわからないまま、東京の人間からいえば信じられないようなわからなさなんです。たとえば、ビルディングを見たことがない。どうやら高い建物らしいということしかわからない。ベッドも見たことがない。病院に入院したものの以外に、ベッドに寝た経験のあるやつがない。だから自分の頭の中で、こういうものであるにちがいないと推理し妄想するわけです（阿久 1997: 56）。

淡路島で過ごした当時について、阿久は現代と違って情報へのアクセスが限定されていたがゆえに、「言葉に対して敏感だったり、言葉に対して強い愛情をもって（阿久 1997: 56）」おり、「物書きとしてはいい時代に生まれ育ったのかな（阿久 1997: 57）」と述懐する。

淡路島で過ごしたことに加えて、阿久悠の日常生活には父親の存在が大きかったと思われる。というのも、父親は駐在所勤務だったため、阿久は幼少期から大学入学で上京するまで、自宅に父親が常にいるなかで過ごしたことになるからだ。この状況について、阿久は筆者に次のように語った。

どう考えても僕の場合、親父が警察官で、しかも都会の警察官ですと普通の勤め人とあんまり変わらない感覚というのがきつとあるんでしょうけど。ところが、駐在所って一番末端のところにいると、24時間（親父の）警官の姿、見てるわけですから。これは僕はすごく幼児体験としては強いもんだなあと思いますね。自分のことを書くときに、親父のことを書いてしまうんです。

こうした特異な環境下で過ごしたうえに、「父も母も宮崎県の出身で、たまたま父が兵庫県巡査となり、たまたま淡路島が勤務地となって、そこでぼくは生まれた。だから淡路には親類縁者もなければ、土地もない（阿久 1999b: 26）」

という事情も重なって、阿久は少年時代から島の外、東京に目を向ける。こうした蒼き時代を阿久は冷静にふりかえる。

私は少年の時から、ずっと「東京」を考えていました。憧れる、ということとは少し違っているように思います。[……] 私という少年にとって、東京は必然だったのです。[……]

私は、ラジオを通じ、新聞や雑誌や映画を通じて、「東京」をかき集めていました。歌謡曲は最大の情報源であったと云えます。私はラジオから流れる最新ヒット曲を聴きながら、それを歌っている人気歌手のステージの晴れ姿を想像することはほとんどなく、その歌に歌われた東京と、その歌が流れる東京の街を妄想し、推理していたのです(阿久 1999a: 28)。

阿久悠は 18 歳の春、1955 (昭和 30) 年に明治大学文学部文学科日本文学専攻への入学にあわせて上京する。阿久は、1930 年代後半から 1940 年代半ばにおいて、幼少期に戦争を体験し、小学校低学年で終戦を迎える。テレビの本放送開始が 1953 (昭和 28) 年であるため、ラジオを情報源にしたのは当然の流れであった。さらに歌謡曲が阿久のそばにあったことは、歌謡曲の作詞家として世に出る阿久の人生と照らし合わすと興味深い。

占領期が終わり、1956(昭和31)年の経済白書で示された「もはや戦後ではない」という戦後復興の象徴的なフレーズや、翌 1957 (昭和 32) 年から始まる高度経済成長の時代に、阿久悠は大学時代で青春を謳歌する。東京都葛飾区立亀有中学校で国語科の教育実習に参加するものの、父親が退職後に故郷の宮崎県に戻ったため宮崎で教員になることを考えたが、宮崎で教員採用の目処が立たなかったため教員への道は断念した。大学の就職課職員の薦めもあり、テレビ映画「月光仮面」(1958-59 年、KRT [現 TBS] 系列で放送) の制作で知られていた広告代理店の宣弘社の社員として、1959 (昭和 34) 年、明治大学を卒業し社会人として歩み出す。

1963(昭和38)年にラジオの放送台本を書く際にペンネームの阿久悠を用いた。その後、1966 (昭和 41) 年に宣弘社を退社し、放送作家として独立する。作詞家としてのシングル・レコード A 面でのデビューは、翌 1967 (昭和 42) 年の《朝

まで待てない》(1967年、作曲：村井邦彦、歌：ザ・モップス)である(明治大学史資料センター 昭和歌謡史研究会 2017: 224-225)。

このように、阿久悠が放送作家からフリーの職業作詞家としての活動を本格化して以降、世に送り出した歌詞は5000を越える。とりわけ、2012(平成24)年12月9日付けのオリコンニュースによれば、前日8日時点で阿久悠が作詞家別シングル総売上歴代トップの座を秋元康(1958-)に明け渡したことがわかった。この時点での阿久悠のシングルの総売上は6834万枚で、松本隆(1949-)、小室哲哉(1958-)、つんく♂(1968-)と続く³。このように阿久悠は名実ともにヒットメーカーであった。阿久悠は特定のジャンルにこだわらず、歌謡曲の世界とは一線を画していたシンガーソングライターへの詞の提供や、CMソング、アニメソング、さらには毎年8月に開催される全国高等学校野球選手権大会、夏の甲子園を全試合観戦し、翌日の新聞「スポーツニッポン」(通称スポニチ)の紙面に「甲子園の詩」と題したコーナーに、試合や選手にスポットをあてた叙情詩を1979(昭和54)年から2006(平成18)年まで寄稿した。

作詞家としての活動以外に、オーディション番組「スター誕生！」(1971-83年、日本テレビ系列で放送)の企画をし、審査員としてテレビ出演し、森昌子(1958-)、桜田淳子(1958-)、山口百恵(1959-)、ピンク・レディー(活動期間1976-1981)⁴をはじめとした歌手のデビューを後押しした。

阿久悠はほかにも、作家、とりわけ小説家としての活動も精力的に行った。なかでも『瀬戸内少年野球団』(1979年)は映画化されただけにとどまらず、直木賞候補にもなった。『殺人狂時代ユリエ』(1982年)で、第2回横溝正史ミステリ大賞を受賞した。ほかにもエッセイを多数、著した。興味深いものとしては、自身が作詞した歌のタイトルを題とし、歌詞とは異なるストーリーを展開させた28の短編小説を収録した『詩小説』(2000年)、自身の創作の手助けとなった日記について現物の写真を含めて紹介した『日記力』(2003年)がある。こうした小説や随筆類を80作品余り世に残した。

2. 阿久悠、卒業論文を語る

ここまで概観したように、阿久悠は歌詞だけにとどまらず、エッセイも数多く著した。なかには、『阿久悠の実戦的作詞講座(上)(下)』(上:1975年、下:

1977年)のような創作の種明かしのことを書いた著作もある。ほかにも新聞や雑誌でのインタビュー記事も多い。しかしながら、阿久悠の創作原点を突き止めることは筆者にとって難解だった。

このようななかで、阿久悠がデビュー 30 周年の 1997 (平成 9) 年頃から自身の詞作や歌謡曲についての著作『書き下ろし歌謡曲』(1997 年)、『愛すべき名歌たち——私的歌謡曲史』(1999 年 b) ⁵ を世に問い、NHK 教育テレビの人間講座において「歌謡曲って何だろう」と題した 30 分番組で 12 回、講義した(阿久 1999a)。

筆者はこれらの著作と講義を中心に、阿久悠が言葉と音楽についてどのような考えを持っているのか、さらに阿久の創作原点の何たるかについて話を伺う機会を得た。偶然にも阿久の長男が筆者と同じ年であったこと ⁶ や、筆者の実家が神奈川県横浜市戸塚区なのだが、阿久が一時期、横浜市戸塚区に住んでいたこともあったため、そのような雑談的な話題から話を始め、阿久悠以外の筆名を使うことや、自身の作詞において音楽ジャンルを意識するかについての質問をしたりした。インタビュー開始 20 分弱ほど経ったとき、筆者は阿久に以下のような問いかけをした。

もし他で発言されたりお書きになっていたら、僕が漏らしていて申し訳ないのですけれども、明治(大学)の学部、大学時代ですか、日本文学科卒業されているということで、卒業論文って何を書かれたのですか。

この質問が完全に終わる前に答えが返ってきた。

僕は『堤中納言物語』。

筆者はすぐに「古いところですね」と返すと、筆者がなぜ『堤中納言物語』を選んだのかという理由を聞く前に、阿久は勢いよく語り出した。

現代はまず駄目だと。卒論のテーマとして、認めてもらえない。せいぜい近世までだと。なんで『堤中納言』を選んだかというと、資料が一番

ないと。資料がなければ、オール・オリジナルでいいだろうという横着な考えを。資料が膨大に資料のあるものと、それを一応、全部、読むなり書き取らなきゃいけないのですけど。

阿久は卒業論文を書くときの制約について、二つのことを語っている。一つは、どの作家作品を扱うにせよ、近現代のものを扱えなかったことである。もう一つは、学問的作法という条件である。「それ（資料）を一応、全部、読むなり書き取らなきゃいけない」と指摘しているように、研究対象に関する先行研究なり、1次資料なり、2次資料なりにきちんと目を通すことは学問の最低条件であるが、阿久悠は、大学時代に徹底的に教育されていたことがわかる。

興味深いことは、学問的作法を破ることなく「オール・オリジナル」で卒業論文を書くことが出来ると述べていることである。自分の考えを資料だけに頼らず前面に出したいという欲求は、その後の阿久の創作と似ている。というのも、阿久は「歌謡曲を書きはじめたときに、それまでとはまったくちがうものを書こうという意欲やヤマツ気があったのは事実です（阿久1997: 62）」と種明かしをしているからである。

では、阿久悠はどのように卒業論文を展開したのだろうか。筆者が阿久に話を伺ったのは彼が62歳の時である。卒業論文の提出から40年の時を経ているにもかかわらず、卒業論文の概要を言葉が淀むことなく説明した。

『堤中納言』を精読したわけじゃなくて。要するに短編小説、日本最初の短編小説だということと、まあいわばサロン文芸に近い作り方をされているということと、日本には珍しく笑いというものを取り上げているということ、この3つをキーワードにして、とにかく何十枚かデッチ上げたという。ユニークといえばユニークですけど、値打ちないっていえば値打ちない。

このように的確に概要をまとめて話すにとどまらず、当時のことを続けて述べた。

しょうがないかってことで、卒業させてくれたと思いますけどね。せいぜい僕は60枚くらいしか、50枚以上の規約ですから。60枚くらいでやっと綴じ紐で綴じて持って行ったら、なんだか提出に来る奴がみんな1000枚くらいをちゃんと製本してもってきているのがいて。うわぁこりゃあ一目見ただけで、俺のは駄目だと。これじゃ読んでもらえないなど。読んでもらえるとすれば短いつてことで(笑)逆に読んでもらえるかなとかね(笑)そんなこと思いながら。ビックリしましたね、あの時は。

現物がないので推測の域を出ないが、阿久のいう1枚とは、400字詰原稿用紙のことを指していると思われる。1000枚というのがかなりの枚数になるので、阿久が綴じ紐で綴じたのに対して、他の学生が製本していたことに驚いて、枚数も多めに見えたのではないだろうか。さらに、阿久は日本文学で卒業論文を執筆する当時の状況を説明した。

あの当時ですと、(近代以降は)まず駄目でした。漱石でも首かしげられてましたから。しばらくしたら、なんか三島由紀夫で卒論書いたというのが10年ぐらいあとで出てきて。へえー三島由紀夫で卒論、通るんだと言ってたら、今年(1999年)、我が社に入ってきたのは阿久悠論で卒論書いたという新入社員がいたりすると、いい時代だなあ(笑)。

ここまで阿久悠が自身の卒業論文と当時の状況を迷うことなく語ったことを提示した。しかも自身が卒業論文を提出し、大学を卒業し、日本文学とは違う道に進んでいても、「三島由紀夫で卒論、通るんだ」というように日本文学での卒業論文への興味はあったようである。

3. 阿久悠論としての「解釈」

阿久悠没後10年の2017(平成29)年に、明治大学教授(現在、名誉教授)の吉田悦志は『阿久悠 詞と人生』を世に送り出した。この書籍の「はじめに」では、阿久悠の卒業論文について次のとおり断定した。

大学時代は、日本文学を専攻し、古典から現代文学までを涉獵して、卒業論文のテーマに「和泉式部」を選んでいた（吉田 2017: ii）⁸。

さらに、本論に入って、東京と題した第3章の1節は明治大学という見出しのもと、同じ下宿で一時期をともに過ごした友人へのインタビューを行ったり、教授陣営も調べたり、阿久悠の過ごした大学時代を多角的かつ丁寧を追っている。さらには、ここまで研究を進めなくてはならない理由を以下のように強調する。

この学部には、こうした文学者たちが現場の文壇動向や息吹を直接学生に伝える伝統的特色があった。阿久悠の自学自習に加えて、この教師たちの文学的影響、あるいは受容関係も視野に入れて「阿久悠論」を構築していく必要がある（吉田 2017: 84）。

ここでの主張から、吉田悦志の阿久悠論が作家作品論的な視点から構築しようということがわかる。だからこそ先述した「卒業論文のテーマに『和泉式部』を選んでいた（吉田 2017: ii）」という記述は、筆者による卒業論文への質問に対して阿久悠が即座に「僕は『堤中納言物語』。」と応え、その理由を述べた「事実」を踏まえると、この吉田の記述はどのように考えればいいのか。読み進めていくと卒業論文のテーマについて言及する箇所に出くわす。

先に記したように、深田雄子さんの記憶によれば、卒業論文のテーマは「和泉式部」であった（吉田 2017: 87）。

ここでは、吉田が「はじめに」で示した断定調とは違う。なお、「深田雄子さん」とは阿久悠の妻である。「先に記した」とあるが、これは「はじめに」で「卒業論文のテーマに『和泉式部』を選んでいた（吉田 2017: ii）」と断定調で示しながらもこの文に注をつけている箇所を指している。だが、この注は脚注ではないため、この文が記されている ii ページよりも 201 ページほど後ろに書かれている。具体的な記述をみてみよう。

二〇一四（平成二六）年六月一八日、阿久悠の長男・深田太郎氏からいただいたメールによる。

本日母から聞いた話です。阿久の卒業論文のテーマは和泉式部だそうです。かなり自信を持っておりましたので間違いはないかと思います。[.....]

私ども（明治大学史資料センター内「昭和歌謡史研究会」メンバー）も八方手を尽くして阿久悠の卒業論文課題を探したが発見できなかった（吉田 2017: 201）。

前述したように吉田悦志は、阿久悠の母校、明治大学教授だったため、明治大学内で卒業論文の現物あるいは題目が記された記録等を、学内関係者ゆえに探しやすかったと思われる。それでも「発見できなかった」というのは残念でならない。さらに残念だったことは、吉田悦志の阿久悠論を構築しようとする学問的姿勢が真摯なものであるだけに、書籍の「はじめに」で断定調にて記したことである。

吉田の著した『阿久悠 詞と人生』のほぼ半年後に、没後 10 年を記念した阿久悠特集が『文藝別冊』として河出書房新社から刊行された。巻末に、「阿久悠年譜」と題した詳細な年譜が掲載されている。これを編んだのが明治大学史資料センター昭和歌謡史研究会だ。つまり、阿久悠の卒業論文課題を探した「私ども」なのだ。こちらの年譜にも、「卒業論文を提出（指導教員 柴生田稔）。テーマは『和泉式部』であった（明治大学史資料センター 昭和歌謡史研究会 2017: 224）。」と断定調で記してある。

おわりに

吉田悦志が、阿久悠は卒業論文に「和泉式部」を選んだと断定してしまった理由は、家族からの情報だったからだと言い切るには事足りない。というのも阿久悠の卒業論文が「和泉式部」だったと指摘されても、違和感がないからである。

阿久悠の歌詞で描かれる女性は精神的に自立した人が多い。これについて阿

久は「強い女性の詞を書くことに心掛けました（阿久 1999a: 92）」と創作の上での工夫を語る。こうした阿久の創作姿勢は、「ふたりでドアをしめて ふたりで名前消して」《また逢う日まで》（1971年、作曲：筒美京平、歌：尾崎紀世彦）、「サイは投げられた もう出かけるわ」《ジョニィへの伝言》（1973年、作曲：都倉俊一、歌：ペドロ&カプリシャス）という詞に結実したといえよう。これらの作品は1970年代前半のものだが、その後も阿久は時代を意識して創作を続ける。そのことがうかがえる阿久の記述を追ってみよう。

大都会は、一人暮らしの女に似合う。高層のホテルも、ブティックも、カフェも、一人暮らしの女のためにあるように思える。彼女たちは颯爽としている。大胆でもある。不良でもある。群衆の中で輝く。しかし、群衆が無縁の人と思えた時、翳る。

その瞬間を見落してしまったら、現代では歌が作れない（阿久 1997: 20）。

21世紀が見えてきたころの、都会で働く女性の日常のありふれた景色に着目している。このように阿久悠は、創作において女性を強く意識していたのである（東谷 2007: 64-65）。

阿久の創作活動や本人の発言に注目すると、女性へのまなざしが創作に与えた影響は大きいと考えられる。阿久悠論構築のために、様々な文献や資料に目を通し関係者からの話に耳を傾けた吉田が、阿久悠が卒業論文のテーマに女流歌人の「和泉式部」を選んだ、と信じこんでしまったことも頷ける。

本小考は、阿久悠が明治大学に提出した卒業論文は『堤中納言物語』であったという「事実」を実証的に提示したものであった。たしかに、「和泉式部」を卒業論文のテーマに選んだという吉田悦志の記述は間違いではあったが、阿久の創作活動を検討すると「解釈」として十分、成立することを指摘した。こうした「事実」を無視した上での「解釈」は理論的に成立しても机上の空論にしか過ぎないのは言を俟たない。やはり「事実」を踏まえる作業の重要性を念頭におくと、阿久悠が卒業論文で何を研究対象としたかについて、本考が確定した意義は大きいと思われる。本小考が今後の阿久悠論の基礎資料となることを願ってやまない。

謝辞

本小考執筆のために、15年ぶりに阿久悠へのインタビューを何回も聞き直した。あらためて駆け出しの研究者だった私に対して、阿久が愛情をもって接してくださっているのを感じた。こういう形ではあるが、卒業論文への「解釈」を阿久悠本人による「事実」の提示ができたことで、少しは恩返しになったかと思う。あらためて阿久悠さんに御礼申し上げます。ありがとうございました。

付記

筆者による阿久悠へのインタビュー日時:1999(平成11)年10月15日(金)
於:オフィス・トゥー・ワン(東京都港区六本木)。録音データは筆者所蔵。

注

- ¹ ここでの記述は、公益財団法人日本近代文学館から筆者への「増補改訂デジタル版『日本近代文学大事典』」執筆依頼書に記されていた刊行経緯をまとめたものである。
- ² 公開は2025(令和7)年2月に予定されている。
- ³ “ORICON NEWS”2015(平成27)年12月9日の秋元康のシングル総売上げ枚数に関する記事による。
- ⁴ 再活動については省略。
- ⁵ 『愛すべき名歌たち——私的歌謡曲史』は、朝日新聞に1997(平成9)年4月～1999(平成11)年4月に連載された「愛すべき名歌たち」をまとめたもの。
- ⁶ ボックスCD『阿久悠30周年特別記念企画「移りゆく時代 唇に詩」～阿久悠大全集～』の別冊解説書に「プロフィール」(pp.8-9)として市販の履歴書に手書きで記された阿久悠の家族欄から長男の年齢がわかった。
- ⁷ 初出掲載は2014年に発行された大学紀要(吉田2014:10-143)である。
- ⁸ 初出の2014年時点で、卒業論文のテーマに「和泉式部」を選んだ(吉田2014:13)と断定している。

参考文献

阿久悠 1975『阿久悠の実戦的作詞講座(上)』スポーツニッポン新聞社出版局。

- 1977『阿久悠の実戦的作詞講座（下）』スポーツニッポン新聞社出版局。
- 1979『瀬戸内少年野球団』文藝春秋。
- 1982『殺人狂時代ユリエ』（カドカワノベルズ）角川書店。
- 1997『書き下ろし歌謡曲』岩波新書。
- 1999a『歌謡曲って何だろう』（NHK 人間講座テキスト）日本放送出版協会。
- 1999b『愛すべき名歌たち——私的歌謡曲史』岩波新書。
- 2000『詩小説』中央公論新社。
- 2003『日記力『日記』を書く生活のすすめ』講談社+α新書。
- 河出書房新社 2017『阿久悠——没後十年 時代と格闘した昭和歌謡界の巨星』（KAWADE 夢ムック、文藝別冊）河出書房新社。
- 篠田正浩・斎藤慎爾（責任編集）2007『阿久悠のいた時代——戦後日本歌謡曲史』柏書房。
- 東谷護 1998a「大衆音楽における表現の広がり——中島みゆきの映像分析を通して」『表現研究』67: 15-22.
- 1998b「新たなる歌詞研究へむけて——阿久悠の歌詞分析を通して」『表現研究』68: 27-34.
- 1999「詞作の心を探る」『ユリイカ』31(4): 103-107, 青土社。
- 2001「歌謡曲を支えたブルスバンド」阿部勘一・細川周平・塚原康子・東谷護・高澤智昌『ブルスバンドの社会史——軍楽隊から歌伴へ』125-149, 青弓社。
- 2005『進駐軍クラブから歌謡曲へ——戦後日本ポピュラー音楽の黎明期』みすず書房。
- 2007「阿久悠にみる原風景としての父」篠田正浩・斎藤慎爾（責任編集）『阿久悠のいた時代——戦後日本歌謡曲史』63-74, 柏書房。
- 2014「ポピュラー音楽にみる『プロ主体』と『アマチュア主体』の差異——全日本フォークジャンボリーを事例として」東谷護（編著）『ポピュラー音楽から問う——日本文化再考』245-275, せりか書房。
- 2020「ポピュラー音楽文化のメディエーターとしての米軍基地」東谷護（編著）『ポピュラー音楽再考——グローバルからローカルアイデンティ

ティへ』75-101, せりか書房.

東谷護(編著)2021『復刻 資料「中津川労音」——1960年代における地域の文化実践の足跡を辿る』風媒社.

明治大学史資料センター昭和歌謡史研究会(編)2017「阿久悠年譜」河出書房新社『阿久悠——没後十年 時代と格闘した昭和歌謡界の巨星』223-231, (KAWADE 夢ムック、文藝別冊)河出書房新社.

吉田悦志2014「阿久悠——人と作詞作品」『大学史紀要』(明治大学史資料センター)19: 10-143.

——2017『阿久悠 詞と人生』明治大学出版会.

CD

『阿久悠30周年特別記念企画「移りゆく時代^{とき} 唇に詩^{うた}」～阿久悠大全集～』(企画・制作・発売元:ビクターエンターテインメント株式会社)

ウェブサイト

「阿久悠オフィシャルウェブサイト あんでぱんだん since 1999」(オフィス・トゥー・ワン): <http://www.aqqq.co.jp/index2.html>, 最終アクセス日:2024年2月14日.

「【オリコン】秋元康氏、作詞シングル総売上が1億枚突破「34年間の積み重ね」」“ORICON NEWS”2015年12月9日.

<https://www.oricon.co.jp/news/2063602/full/>, 最終アクセス日:2024年2月25日.

基礎資料（東谷護による阿久悠へのインタビューより）

——阿久悠の卒業論文をめぐって——

東谷——根底になるところで、もし他で発言されたりお書きになっていたら、僕が漏らしていて申し訳ないのですけれども、明治（大学）の学部、大学時代ですか、日本文学科卒業されているということで、卒業論文って何を書かれたのですか。

阿久——僕は『堤中納言物語』。

東谷——古いところですね。

阿久——要するに、僕の時代までは、現代はまず駄目だと。卒論のテーマとして、認めてもらえない。せいぜい近世までだと。なんで『堤中納言』を選んだかという、資料が一番ないと。資料がなければ、オール・オリジナルでいいだろうという横着な考えを。資料が膨大に資料のあるものと、それを一応、全部、読むなり書き取らなきゃいけないのですけど。はじめから、先生も無いって言ってるんですから。無いんならこれはオリジナルでいいと。だからもう、あの当時からだいたい似たような感覚でしたから。

『堤中納言』を精読したわけじゃなくて。要するに短編小説、日本最初の短編小説だということと、まあいわばサロン文芸に近い作り方をされているということと、日本には珍しく笑いというものを取り上げているということ、この3つをキーワードにして、とにかく何十枚かデッチ上げたという。ユニークといえばユニークですけど、値打ちないって言えば値打ちない。

まあ、しょうがないかってことで、卒業させてくれたと思いますけどね。せいぜい僕は60枚くらいしか、50枚以上の規約ですから。60枚くらいでやっと綴じ紐で綴じて持って行ったら、なんだか提出に来る奴がみんな1000枚くらいをちゃんと製本してもってきているのがいて。

うわぁこりゃあ一目見ただけで、俺のは駄目だと。これじゃ読んでもらえないなど。読んでもらえるとなれば短いってことで(笑)逆に読んでもらえるかなとかね(笑)そんなこと思いながら。ビックリしましたね、あの時は。

(略)

東谷——文学というだけじゃなくて、もうちょっと広い意味での日本文化論的なものがないかなと僕は(専門を)移っていくんですけども。

阿久——それは、僕が思ってた線ですよ。僕が望んでた線ですよ(笑)。それはあの当時ですと、(近代以降は)まず駄目でした。漱石でも首かしげられてましたから。しばらくしたら、なんか三島由紀夫で卒論書いたというのが10年ぐらいあとで出てきて。へえー三島由紀夫で卒論、通るんだと言ってたら、今年(1999年)、我が社に入ってきたのは阿久悠論で卒論書いたという新入社員がいたりすると、いい時代だなあ(笑)1回、見せろとは言ってるんですけど。

東谷——でも、だいぶ変わってきましたね。現存する、生きてらっしゃる作家についてOKがだいぶ、いま、出てきているんですよ。たぶん外国の影響だと思うんですけど、いろんな、それこそなかには、この書物ですか、印刷技術とかそれを日本文学の卒業論文で、どういう風が変わったか。要するにメディアが、どういう風に本とか書籍にどういう風に影響を与えたかという研究が進んでますから。いい意味で開かれてきているんですよ。

阿久——小説にしろ小説家にしろ、書齋のなかだけの考察、あるいは文芸誌、文学誌のなかだけの位置づけみたいなことでは意味を、意義を感じられなくなっているとなると、情報論もメディア論も、きっとそれに重なってくるでしょうし。その重なったのが、その作家の価値なり何なり

というのを書くような形になってくるのかな、と思いますけどね。

東谷——そのなかで、卒業論文、なんかあるのかなあと思ったのは。温泉のこと書かれてますよね。温泉行って……物書きの条件じゃないかと書かれていて。

阿久——作家っていうのは、そうするものだと思ってたところある。ただね、それはどっかでね、あれは実に恥ずかしいと思いはめるんですね。それまでやっぱり机の前に着物着て座ってとか、温泉へ何日か泊まり込んでとか、太いペリカンの万年筆を使うとかね。そういったことがある種の条件みたいに感じてた時があるんですけど。書き始めてくると、あれやっちゃ駄目だというのが、どっかで出てきますね。まったくもう今の僕の仕事の仕方っていうのは、文士の仕事の仕方とは、かけ離れた感じがするけど。かけ離れたと思ってたら、この頃、みんなワープロ使い始めましたから、僕が手書き縦書きでやってますとね、最後の文士になりそうで(笑) 逆にできて、困ったなあとってますけど。

以上、インタビュー日時：1999（平成11）年10月15日（金）於：オフィス・トゥー・ワン（東京都港区六本木）録音データは筆者所蔵。